



## 『卓 話』

松 本 道 彦 会 員

卓話は、自分のロータリーライフにおいて少なくないウェイトを占めています。卓話については、時の会長ができるだけ会員自身が行うべきとの方針、また、外部の講師を積極的に招いて欲しいといった年度、そういったことに特に指示はない年度と、様々です。

自分にとっての卓話はどういったものであったか、少し振り返ってみたい。

入会したとき、会員数は72名で、初代会長や浅井彌七郎会員を筆頭に地域の重鎮とおぼしき方が多数在籍されていた。こういった方々を前にして30分程度話をするのができると知った時、ワクワク・ドキドキ胸が高鳴りました。こんなチャンスは今までの自分にはなかった、ロータリークラブというのはすごいなとも感じたように思います。

初めて「卓話」の機会が巡ってきたとき、何を話しするかについてかなり考え、相当の準備もしました。特に気になったのが、遅くもなく、早くもなく、丁度の時間で話を終えることができるように気を配りました。そういった準備をして臨んでも、あそこが抜けた、ここがまずかったと満足できる結果ではありませんでしたが、当然のことです。

以来、多くの卓話を経験しましたが、常に心地よい緊張感に包まれます。ただ、最近はいくつかの引き出しを準備しておけば時間の調整は何とかなるといった厚かましい思いが顔を出します。これは進歩というより墮落であります。

卓話のみならず、人前で話をする機会、PTA、業界団体、地域といろいろありましたが、自分に言い聞かせているのは、たとえ5分の話でも50人の前なら一人に換算すると250分、4時間余りの時間になるわけだから、その旨をしっかりと認識し、ゆめゆめ5分程度なら適当に流せなどと考えるはいけないということです。時と場合によっては突然挨拶を振られることがあります、そんな場合でも1分、2分の時間をフル回転させて何を話しするか真剣に考えます。

卓話も然りですが、挨拶一つするにしても、起承転結を考えねばなりません。「京都三条いとやの娘、姉十八妹十五、諸国の大名弓矢でころす、いとやの娘目でころす」こ

これは起承転結の具体例ですが、やはり難しいのは「結」で、体操で言うならフィニッシュが決まるかどうかで大きく評価に影響します。

「会長の時間」でのスピーチは3分、長くても5分程度でしたが、このために費やした時間は少なくありませんでした。時間を要したのはフィニッシュをどう決めるか、これに尽きます。今思えば充実した良い1年でした。

話し方についても努力しました。と言うのも、ある時期まで話の中に、「エー」「アノー」「ソノー」が多く、自分で嫌気がさしていました。どのようにこの癖を治すか悩んでいた時、「間」をとればいいのではとのアドバイスがありました。そのためには、ゆっくり話すことを心掛け、次に言葉をつなぐとき少し間をとることを意識しました。その結果、知らないうちに克服していたように思います。

話し方について肝心なことは、話の上手な人を参考にすることです。何をもって上手とするかとなると意見の分かれるところですから、まず、自分の好きな話し方を参考にすることがいいのではないのでしょうか。因みに、好みの話し方をする人は、金美齢さん、もうお亡くなりになりましたが渡辺和子さん、ほかにもありますが、敢えて上げればこのお二人です。

深川PG、安平PG、そして久野PG、これらの方々のお話は、付け焼刃でない長きにわたる積み重ねが言葉となっているのだと感得させられました。知性・教養・見識といったものは一朝一夕に身につくものでなく、日ごろの努力、研鑽があって成り立つもので、参考にしたくともできるものではありません。しかし、叶わずとも斯くありたいと努力しなければ面白くありません。

「卓話」担当のときは、緊張もするし、何を話すか考えを巡らし、上手な話しをしたいとプレッシャーを自分にかけています。そうすることが自分を成長させるのだと思うものの、年齢74にして今更成長でもないと思わないでもありませんが、やはり、幾つになっても向上心は持ち続けたいものです。「卓話」はロータリーの最大・最高のプログラムです。